

本校の先輩達

終戦の年の 荘原小学校



【▲昭和20年3月荘原村国民学校卒業生(男子児童)】

平成27年8月15日は、70回目の終戦記念日です。

今回は、昭和20年の終戦時の荘原を振り返ってみたいと思います。

昭和16年4月から学校は国民学校と改称され、学校教育も戦時体制へと組み込まれました。そして同年12月の真珠湾攻撃とともに太平洋戦争へと突き進んでいきます。

昭和20年3月には、出西村新川廃地に航空基地（大社基地）建設が着工となり、3月27日（火）に美保航空隊の前田少佐を隊長とする部隊が進駐し基地建設にあたりました。荘原村国民学校の校舎もその宿舎となりました。6月には大社基地は完成し、九州の鹿屋基地から搭乗員部隊が、美保基地から工員隊が進駐してきたと伝えられています。そして、6月20日（水）、大社基地（出西飛行場）から爆撃機「銀河」3機が沖縄へ向け初出撃したとの証言も残されています。しかし戦況は刻一刻と悪化していき、7月終わりには、九州各地の基地から、米軍による空襲を避けて大社基地へ戦闘機が続々と集まって混雑したとされています。

当時の子ども達は、どのような風景を目の当たりにしたのでしょうか。

『荘原村尋常・高等小学校沿革史』によれば、戦時特別記事として「昭和20年7月6日（金）、空襲熾烈化により学校を村内13箇所に疎開す。」との記録が認められます。そして、13の分校名の記載が続きます。

第一分校…下畑公会堂	第二分校…学頭昌子氏宅	第三分校…学頭飯塚氏宅
第四分校…学頭宮	第五分校…下庄原天理教会場	第六分校…下庄原公会堂
第七分校…新田吉野氏宅	第八分校…観音寺	第九分校…下庄原宮
第十分校…神庭宮	第十一分校…羽根宮	第十二分校…吉成宮
第十三分校…上庄原宮		

戦況はさらに逼迫したものになり、7月28日（土）には、大社基地をはじめ山陰各地が空襲被害を受けました。そして、8月6日は広島市への原子爆弾投下、当時荘原からも多くの方が学徒動員等で広島の軍需工場へ出かけていらっしゃいました。

この村内疎開は、終戦により前田部隊撤収とともに、8月24日（金）分校は解散となり、全児童が本校復帰となります。当時の荘原村国民学校の尋常科・高等科の児童数は、大阪市西区・西淀川区からの学童疎開児童も加えて1,040名でした。大変な数の児童が荘原町で生活していたこととなります。その時、尋常小学校の児童であった方々も、すでに70歳後半から80歳前半になっていらっしゃいます。

『荘原村尋常高等小学校沿革史』 『斐川村軍事小史 阿宮編』長瀬貞市編 斐川斐水会出版 S37.7刊
『斐川と学童集団疎開～21世紀に伝えたい貴重な証言～』斐川町 平成13年3月刊